

タイ王国・スタディーツアー2015

報告書



一般財団法人 青少年国際交流推進センター

施設での様子



タイ王国・スタディツアー2015

CONTENTS

I.	タイ王国・スタディツアー2015 概要	2
1.	目的	
2.	研修企画、後援	
3.	日程	
4.	参加者人数	
5.	スタディツアー内容	
II.	研修企画、後援、関連協力団体について	3
1.	一般財団法人 青少年国際交流推進センター（研修企画）	
2.	日本青年国際交流機構（IYEO）（後援）	
3.	「東南アジア青年の船」事業タイ事後活動組織(ASSEAY Thailand)(後援)	
4.	Fund For Friends（FFF）	
III.	スタディツアー日程	4
IV.	訪問した児童養護施設について	6
1.	子どもの村学園：ムーバーンデック	
2.	タマヌラック	
3.	フォーデック	
V.	For Hopeful Children Project（FHCP）2015	9
1.	概要	
2.	創設者 Visit Dejkumtorn 氏	
3.	宣言文の署名	
4.	テーマについて	
5.	FHCP2015 参加団体	
6.	参加団体の所在県	
VI.	参加者名簿	12
VII.	参加者感想文	13

I. タイ王国・スタディツアー2015 概要

このスタディツアーは、タイの児童養護施設を訪問し子どもたちの生活環境を知ることと、タイの青少年健全育成プロジェクト「For Hopeful Children Project (FHCP) 2015」にボランティアスタッフとして参加することを組み合わせた（一財）青少年国際交流推進センターの独自プログラムです。

1. 目的

「タイ王国・スタディツアー2015」への参加を通じて、参加者が国際協力活動を実践するとともに、国際協調の精神を養います。また、青少年の役割に関する意見交換を行うことで日本とタイの友好関係を深め、連携を強化する活動を通して国際社会の進展する時代にふさわしい青少年の育成に寄与することを目的としています。

2. 研修企画、後援

【研修企画】

一般財団法人 青少年国際交流推進センター

【後援】

日本青年国際交流機構（IYEO）

「東南アジア青年の船」事業タイ事後活動組織
（ASSEAY Thailand: Association of the Ship for Southeast Asian Youth of Thailand）

3. 日程

平成27年3月16日（月）～3月24日（火）

（バンコク集合・解散）

4. 参加者人数

参加者 7名 / 引率者 2名

5. スタディツアー内容

【児童養護施設への訪問と活動（前半）】

児童養護施設「子どもの村学園：ムーバーンデック」と「フォーデック」、「タマスラック」の3か所を訪問し、子どもたちと生活・活動することを通じて交流を深めると共に、タイ児童養護施設の実態について理解を深めます。

【For Hopeful Children Project(FHCP)での活動(後半)】

FHCPは、「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年が自身のネットワークをいかし始めた慈善事業で、孤児や難民、障がいを持っているなど社会的に恵まれない状況にある子どもを「希望あふれる子どもたち（Hopeful Children）」と呼び、彼らをタイの海軍施設に招いて海水浴等を行います。日本からのスタディツアー参加者は、タイ国内外のボランティアスタッフと協働し、プロジェクトに参加する子どもたちの安全管理やサポートをします。



タイ人スタッフ（前列左から2番目）と、映画「戦場にかける橋」で有名なクウェー川鉄橋をバックに

II. 研修企画、後援、関連協力団体について

1. 一般財団法人 青少年国際交流推進センター (研修企画)

国際化が急速に進展し、日本人と外国人、外国文化との関わりが一層深まるとともに、国際社会において日本が果たすべき役割への期待も高まっています。世界に対し日本が重要な役割を果たし発展を続けていくためには、それにふさわしい青少年を育てなければなりません。

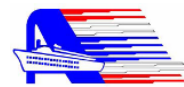
当センターは青少年国際交流事業の実施、交流に関する啓発、情報提供、支援等を通じ社会の各分野において国際化時代にふさわしい指導性を発揮できる青少年の養成、そしてこれらの青少年による人的ネットワークを形成することで青少年の国際交流を一層推進することを目的に、平成6年4月21日に設立されました。

2. 日本青年国際交流機構 (IYEO) (後援)

日本青年国際交流機構 (International Youth Exchange Organization of Japan: 略称 IYEO) は、昭和34年に始まった内閣府 (総務庁・総理府) が行ってきた青年国際交流事業 (「青年海外派遣」、「青年の船」、「東南アジア青年の船」、「日伯青年親善交流」、「日本・中国青年親善交流」、「オマーン親善交流」、「国際青年年記念青年海外特派員派遣」、「日本・韓国青年親善交流」、「世界青年の船」、「国際青年育成交流」、「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」) の既参加青年で組織され、会員数は約15,600名に達しており、全国47都道府県に都道府県青年国際交流機構が置かれています。

IYEO は、青少年国際交流事業で得た成果を踏まえ国際理解を深め、国際親善に寄与し広く社会に貢献するとともに、会員相互の交流と研さんを図ることを目的としています。

3. 「東南アジア青年の船」事業 タイ事後活動組織 (後援)



(ASSEAY Thailand: Association of the Ship for Southeast Asian Youth of Thailand)

<http://www.asseay.org/>

「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年の事後活動組織で、事業参加で得た成果を広く一般に普及することを目的に掲げています。1974年の第1回事業後から、既参加青年の同窓会組織は存在していましたが、1982年7月12日に正式な団体として設立されました。タイ政府社会開発・人間安全保障省福祉振興及び社会的弱者の保護・自立庁 (Office of Welfare Promotion, Protection and Empowerment of Vulnerable Groups) から全面的なサポートを受けています。

4. Fund for Friends (FFF)

<http://www.fffthai.org/>



FHCPの主催者であるFFFは、第2回「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年である Mr.Visit Dejkumtorn (ウイスイット・デッカムトーン) が代表を務めるボランティアグループで、世界中の社会的弱者 (FFFでは「友人」と呼びます) を対象に、社会を住みやすい場所にするための活動をしています。FFFは多くの青年団体に認められ、民間、公営団体と綿密に協働してきました。FFFは、見返りを求めないボランティアというスタンスを貫き、特に子どもを対象とした多くのプロジェクトを扱っており、最終的には支援を通じ、子どもたち自らが自立することを目標としています。



3月上旬にバンコクで行われた、ボランティアスタッフへのオリエンテーションと事前打合せの様子

III. スタディツアー日程

月 日	時間	活動内容	宿泊先
3月16日 (月)		バンコク Imm Fusion Sukhumvit集合	バンコク Imm Fusion Sukhumvit
3月17日 (火)	7:30-8:30 8:45 12:30-14:00 15:00 16:00-16:30 17:30-18:30 19:00-21:00 21:30-22:30	朝食 (Imm Fusion Sukhumvit) ホテル発 貸切バスで移動 昼食 (カンチャナブリー) クウェー川鉄橋「戦場にかかる橋」視察 子どもの村学園:ムーバーンデック着 【ムーバーンデック】 での活動 ➤ 子どもたちと川遊び 夕食 (ムーバーンデック) 歓迎会 ➤ バーシーセレモニー (歓迎の意を込め先生や子どもが日本参加者の幸せを祈り手首に糸を巻いてくれた儀式) ➤ 子どもたちによる踊りや楽器演奏 ➤ 日本参加者より「しあわせなら手をたたこう」披露 参加者ミーティング	カンチャナブリー ムーバーンデック
3月18日 (水)	7:30-8:00 9:30-12:30 13:00-14:00 14:00-17:30 18:00-19:00 19:00-21:30 21:30-22:30	朝食 (ムーバーンデック) 【タマヌラック】 訪問・活動 ➤ 子どもたちと交流 ➤ 日本文化紹介ワークショップ (折り紙、風船など) 昼食 (ムーバーンデック) 【ムーバーンデック】 での活動 ➤ 職業訓練ワークショップ体験 (竹、粘土細工、手芸など) ➤ 施設見学 (ソーラーシステム、自給自足の畑など) ➤ メーニー副校長より学園概要説明&質疑応答 夕食 (ムーバーンデック) ➤ 交流会・日本文化紹介 ➤ 子どもたちによる踊りや楽器演奏 参加者ミーティング	カンチャナブリー ムーバーンデック
3月19日 (木)	7:00-7:30 8:30 11:15-12:00 15:00-17:30 18:30 19:00 22:00-23:00	朝食 (ムーバーンデック) ムーバーンデック発 昼食 (ナコーンパトム県) 【フォーデック】 訪問 ➤ 子どもたちとダンス交流 (世界手洗いダンス披露) ➤ 近隣の住宅 (低所得者層家庭) 訪問 ホテル着 FHCPボランティアスタッフと夕食会 参加者ミーティング	バンコク Imm Fusion Sukhumvit

月 日	時間	活動内容	宿泊先
3月20日 (金)	8:00 10:00 11:30-12:15 15:15 15:30-17:30 19:00 20:00-22:15 22:45	朝食 (Imm Fusion Sukhumvit) 近くのスーパーで交流物品や飲料水購入 チョンブリー県へ向けてバンコク発 昼食 (途中のサービスエリア) FHCP会場 (サタヒーブ海軍施設 Sattahip Naval Base) 着 FHCPボランティアスタッフ・オリエンテーション ▶ 自己紹介・アイスブレーキング・施設見学 夕食 (海軍施設内) FHCP準備、ボランティアスタッフミーティング ホテル着、日本文化紹介準備	チョンブリー Chaorua Resort
3月21日 (土)	7:30 10:00 11:00 12:00 13:00 15:00-17:00 18:00 19:00-21:00 21:30-22:15 22:30	朝食 (サタヒーブ海軍施設内) 子どもたち各団体FHCP会場着 【For Hopeful Children Project 2015】 子どもたちとアイスブレーキング 昼食 開会式、ギフト贈呈、世界手洗いダンス披露 海水浴 夕食 海軍によるドッグ・ショー 参加団体のパフォーマンス披露 FHCPボランティアスタッフミーティング ホテル着	チョンブリー Chaorua Resort
3月22日 (日)	7:00 7:15 9:00 10:30 11:30 13:00 15:30 18:00 19:00-21:00 21:00 21:30-22:00 23:00	FHCP会場着 朝食 (サタヒーブ海軍施設内) 海軍船乗船体験・消防はしご車体験 アスレチック体験 昼食 各団体によるブース別ワークショップ 日本紹介ブース展示 海水浴、海軍によるパラシュート演習 夕食 各団体によるパフォーマンス披露 日本参加者によるソーラン節披露 各団体代表者ミーティング FHCPボランティアスタッフミーティング ホテル着	チョンブリー Chaorua Resort
3月23日 (月)	7:00 7:30 8:30 12:30 14:30 18:00	朝食 (サタヒーブ海軍施設内) 閉会式リハーサル 閉会式 ボランティアスタッフへ参加証授与 FHCP会場発 (昼食：バス内でお弁当) バンコク着 夕食	バンコク Imm Fusion Sukhumvit
3月24日 (火)		バンコクにて解散	

IV. 訪問した児童養護施設について

1. 子どもの村学園:ムーバーンデック

Children's Village School,
Foundation for Children (Moo Baan Dek)
<http://www.ffc.or.th/mbd/>

(1) 概要・目的

カンチャナブリー県にある児童養護施設ムーバーンデックは、1979年に設立されたNPOで、両親のいない又は貧困・家庭崩壊などの事情で育児のできない家庭出身の子どもたちを預かっている施設です。3歳以上の子どもたちが共同生活をする場であり、タイ教育省から認可を受けた彼らの学校でもあります。子どもたちが既成の概念にとらわれることなく、自分たちに最も適切なやり方（これを「オルタナティブ教育」と呼びます）を受けることができる小さなコミュニティです。

ムーバーンデックは、タイ国内で行われている型にはまった教育方法でなく、より優れた教育方法を求め実践することを目的に設立されました。創始者 Mr. Pibhop Dhongchai (ピボップ・トンチャイ) の理想は、子どもと大人が平等に生活できる学習の場を作ることでした。このようにしてできあがったこの学園の最大の目的は、自由と自治を通して、子どもたちが自分自身を完全に理解し、人生の意義を発見できるようにすることです。

(2) 教育方針

この学園の根底にある教育思想は、英国の教育思想家 A.S.ニールが唱えたサマーヒル学園の精神をもとにして、子どもの自由と意思を尊ぶ教育を実践しています。ニールは、子どもの態度が生まれた後のしつけや生活環境に起因して変わるものであると信じていました。従って、子どもたちの性格上の問題点は、決して直らないものではないし、子どもたちの苦痛を癒す環境を作ることにも可能なのです。このような考えをもとに、ムーバーンデックでは、子どもの精神と想像力を育成するための場を作ることに重点を置いています。

学園の子どもたちは、貧困や虐待経験といった過酷な過去を持つ子どもたちがほとんどです。しかし、十分な愛情と注意を注ぎ、権力による押し付けのない自由な雰囲気の中で育み、そして住居や十分な食事といった自分たちの基本的欲求が絶対に満たされるのだと

いう安心を与えれば、どんな子であろうと、子どもたちの情緒面でのストレスや習慣的な偏向は癒され、力強く成長し始め、自分自身の潜在的な能力が最大限に引き出されます。また、学園では、子どもたちが日々接する環境と自然の中から学べるように配慮されています。学園の70%は豊かな農地と森で覆われ、子どもたちは決して小さな教室に閉じ込められることはなく、先生や母なる自然とともに、自分自身で学んでいきます。そして、再び外の社会に戻る前に、自己に対する認識と十分な自信を学び得るのです。

ムーバーンデックでは、そこに更に、仏教の教えも取り入れています。



ムーバーンデックでの川遊びの様子

(3) 子どもたちの生活

学園には複数の家があり、異なった年齢の、異なった境遇の子ども（10～12人）と大人（2～3人）が同じ家で生活をともにしています。そこでの共同自治生活を通して、子どもも大人もお互いに学びあい、受け入れあいます。それぞれの家で、食費の管理から家の掃除、食事準備や家の周りにある花壇の世話にいたるまで、あらゆる家事の方法を学びます。

学園では、子どもたちは、学校の授業や学園が用意した活動に参加するかしないかを自分で決めることができます。授業や諸活動への参加は、子どもたちの自発的な行動によるものであり、その判断は子どもたち自身の問題であって、子どもたちによって異なるからです。従って、強制的に授業を受けさせたりすることはありません。ここでは、先生は支配する立場ではなく、子どもたちに学習意欲をもたせ、子どもたちがそれぞれにやりたい科目や活動を自分で決めることがで

きるように導くことが先生の役割です。これは、「良い友だちであること（カラヤナミトラ）」という仏教の思想に基づくもので、先生は子どもたちの友だちとして振る舞い、子どもたちを抑圧することなく、手助けをしています。

子どもたちは自由が守られているからといって、他人の権利を侵害しても良いという訳ではありません。子どもたちは、(サマーヒル学園の方法を取り入れた)学園評議会による直接民主制を通してこのことを学びます。学園評議会は金曜日の午後に行われる公式集会で、そこでは子どもも大人も平等に、そして自由に意見を戦わせます。その中で、学園内の諸問題を解決する方法を提案したり、生活に関わる規則を改廃したりして、学園の自治制度と秩序を守っています。

ムーバーンデックの一日

＜平日＞

- 5:30 起床
- 6:00 菜園の世話
- 7:00 家の掃除
- 7:30 朝食
- 8:30 朝礼（国歌斉唱、読経、瞑想）
授業（小学校卒業以上の生徒は職業訓練ワークショップ）
- 12:00 昼食
- 13:00 職業訓練や芸術系のワークショップ（ろうけつ染め、裁縫、陶芸、織物、電気配線技術、大工技術、英語、事務処理、タイピング、コンピューター、パン焼き、音楽、木工、科学、などの中から、生徒が自由に選択して実習）

※毎週金曜の午後のみ：学園評議会

- 16:00 おやつ
- 16:30 川で水浴び
夕食（自分たちで調理）
- 21:30 自由時間（図書館の開放、ニュースやビデオの放映なども用意されている。）

＜週末＞

土・日曜日の午前中、子どもたちは学園の環境改善活動（清掃や植樹、堆肥作りなど）に取り組む。その他、来訪者との特別活動、読書やビデオ鑑賞などに自由に参加したり、屋外で元気に遊びまわったりしている。

(4) 子どもたちの進路

子どもたちは、小学校卒業までは学園内で教育されますが、その後は主に政府の援助する週末学校プログラムにて上級の教育を受ける機会が与えられています。平日は、職業訓練プログラムを中心に学園内で様々な仕事に従事し、その仕事に対し学園の調整のもとに給料が支払われます。子どもたちは、これを授業料・交通費・食費・教科書代などの学資金にして進学します。



かぶり物でポーズをきめた子どもたちと

(5) スタッフ・資金面など

ムーバーンデックでは約30人の常勤スタッフが働いており、その半数が先生、残りがソーシャルワーカーや会計・管理担当などです。学園を巣立った子どもが、学園で働きたいと戻ってくるケースもあります。

資金源は、80%がタイ国内の個人や企業からの寄付、残りの20%が国外（主に日本やフランスなど）からの寄付でまかなわれています。政府と異なる理念に基づき活動しているため、政府からの援助金は一切受け取っていません。

その他にも学園では、国内外からの団体や個人の訪問を多く受け入れることを通じ、オルタナティブ教育の推進に力を注いでいます。その一環として、日本の子どもたちを毎年一週間ほど受入れ、子どもたち同士の国際交流を実践しています。毎年数百人の外国人が学園を訪問しています。



「世界手洗いダンス」を一緒に踊る

2. タマヌラック

Dhammanurak Foundation

カンチャナブリー県にあるタマヌラックは、仏教の精神に基づき尼僧により2000年に設立され、さまざまな理由で両親のいない又は育児のできない家庭出身の子どもたちを預かっています。仏教の精神を学ぶ少年僧や少女の尼僧、そして、タイ・ミャンマー国境地域で生まれた山岳少数民族（カレン族、モン族）の子どもたちも共同生活を送っています。また、子どもたち全体のうち7割強が女の子です。



仏教精神を教えるタマヌラックの子どもと遊ぶ

3. フォーデック

Foundation of Rehabilitation and Development of Children and Family (FORDEC)

<http://www.fordec.th.org/>

(1) 沿革・概要

フォーデックは、低所得層の子ども、若者、家族、高齢者などを支援するため設立された団体です。サポートを受けている人の中には、障がい者、ホームレス、麻薬中毒者、虐待を受けた経験を持つ人などもあります。

今回スタディツアーでは、サムットプラカーン県にある、同団体が運営する児童養護施設を訪問し、近隣の低所得層家庭から通ってくる子どもたちと交流した後に、彼らの住宅を訪問させていただきました。創始者 Dr. Amporn Wathanavongs（アムポン・ワッタナウォン）は、自身が身寄りのない孤児として、住む家もなく、食べるものも充分にない生活を送った経験から、自分と同じ体験をしてほしくない、という思いで、困難を抱えたすべての人々に対する愛と心配りのため自身の人生をささげる決意をしました。

タイが1997年に経験した経済危機により失業者が増加、その家族や子どもたちが住む場所を失う、生活が困難になるなど大きな影響を受けました。そんな社

会状況下、1998年2月14日、聖バレンタインデーにフォーデックが設立されました。聖バレンタインは愛の象徴であり、人種・肌の色・宗教などの違いに関わらず「困難を抱えたすべての人々に対する愛と心配り」をモットーとするフォーデックを象徴しています。

「デック（DEC）」とは、タイ語で「子ども」を意味します。そのため、フォーデックという略称は「子どものために」という意味も兼ねています。

(2) 活動方針

- ・低所得層家庭・ホームレスの子ども、障がい児、薬物依存症の青少年、HIV/エイズと共に生きる子どもたちなどに、物質面・精神面のサポートを行うことにより、彼らの生活環境改善に取り組む。
- ・一般社会での生活に困難をきたさないよう、子どもたちの文化的・倫理的・道徳的価値観を高める。
- ・生活の衛生状況改善のためのサポートをし、家庭の収入を向上させるための職業的サポートを行う。
- ・同様の活動をする団体と協力し公共の利益に取り組む。

(3) 運営モデル

フォーデックでは「困難を抱えたすべての人々に対するあなたの愛と関心を」という呼びかけの下、寄付を募っています。一日当たり30バーツ（約110円）、一か月当たり900バーツ（約3330円）で、一人の子どもを支援できます。この寄付により、その子どもは基本的に生活に必要なもの（食事、衣類、医療、教育の機会、能力に応じた職業訓練）を受けることができます。もしくは、500,000バーツ（約185万円）の寄付により、その寄付者の名前で基金を設立します。この場合は、その利子により、一人の子どもの基本的に生活に必要なものをサポートすることになります。通常、子どもたちは18歳に達するまでサポートを受けます。



子どもたちによる踊りの披露

V. For Hopeful Children Project (FHCP) 2015

1. 概要

1991年に始まったFHCPはタイのボランティアグループFund for Friends (FFF)が毎年実施しているプロジェクトで、今年25回目を迎えました。チョンブリー県にあるサタヒーブ海軍施設 (Satthahip Naval Base) に、孤児院や盲学校、山岳民族や難民の子どもたちを預かる児童養護施設から、子どもたちと引率者が招かれ、共同生活や海水浴等のアクティビティが行われました。タイをはじめ、フィリピン、ラオス、ベトナム、オーストラリア、フランス、日本など15か国より約120名のボランティアが参加し、子ども・引率者と合わせると、参加者総勢1200名規模の一大プロジェクトとなりました。

タイ各地から集う子どもたちの会場までの移動手段であるバスやその燃料、食材の野菜、米や油その他、FHCPの運営に必要なものすべてが、企業・団体・個人の寄付によって賄われています。地元企業による協賛やチャリティーによる食べ物の屋台が出て、子どもたちに料理やおやつが振る舞われました。

海水浴の安全管理や会場運営のロジスティックス面において海軍の兵士たちが全面協力していました。期間中、子どもたちは、海軍のドッグ・ショー、パラシュート・デモンストレーションや軍用船の乗船体験、消防はしご車体験、環境教育の一環としてサンゴの植付け、各団体によるワークショップを楽しみました。

2. 創設者 Visit Dejkumtorn 氏

Mr. Visit Dejkumtorn
(ウィスイット・デッカムトーン)

FHCPの主催団体FFF代表。「東南アジア青年の船」事業のタイ既参加青年で、自身の人脈を生かし1991年に慈善事業であるFHCPを開始。



「25年前、たった一人で始めたボランティア活動が、
官民レベルで多くの支援者を巻き込み、
1200人規模の参加者を誇る大きなイベントになった」

—— Visit Dejkumtorn



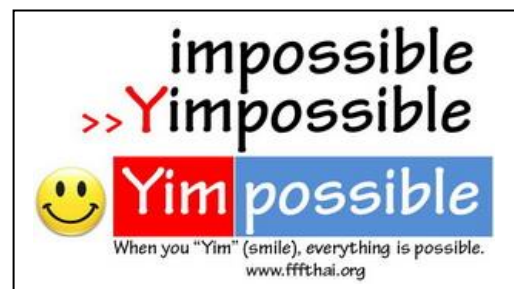
3. 宣言文の署名

FHCP 第25回の開催を記念し、協賛企業、主催者のFFF、参加団体、そして一般財団法人青少年国際交流推進センターといったプロジェクト支援者は、今後の支援継続に向けた宣言文に署名をしました。FHCPの会場となったサタヒーブ海軍施設の海岸の名称をとって「トゥイガーム宣言」と名付けられました。

4. テーマについて

FHCPでは例年「Global Smiling (グローバル・スマイリング)」を大きなテーマとして掲げています。Visit氏が、環境問題の地球温暖化“Global Warming”をもじって“Global Smiling”に変えたもので、そこには「温暖化」ではなく「笑顔」を広げ、社会に対し持続的に貢献したいという願いが込められています。

それにちなんで今年のコンセプトになったのが、「Yim Possible」。「不可能」という意味の英語“impossible”に“why”をつけると“why impossible?” (なぜ不可能?) という質問になります。その“why”を“Y”に変えると“Y impossible”となり、Yimはタイ語で「笑顔」という意味なので“Yim possible”つまり「笑顔は不可能を可能にする」という、遊び心を含んだ、深い意味が込められているのです。Visit氏の思いは、図のようなロゴマークとなり、今年のスタッフTシャツにプリントされました。



ロゴのついたTシャツを着る各国のボランティア

5. FHCP2015 参加団体

(1) CCD

Christian Care Foundation for Children with Disabilities in Thailand

<http://www.ccdthailand.org/>

a. 沿革・概要

バンコクの北、ノンタブリー県にある CCD は、経済的理由などで育児のできない家庭出身の障がい児（視覚・聴覚障がい、肢体不自由などの身体障がい、精神・知的障がいなど）をサポートしています。

CCD の活動は、1986 年に、英国 Christian Outreach for Relief & Development (CORD) のサポートにより、Wasan & Charyia Saenwian 夫妻が、障がい児のための福祉施設「Rainbow House」を設立したことから始まりました。1997 年には、CORD のサポートで CCD としてタイにおける NGO 登録をし、地域密着型福祉を目指した活動を実践中です。

タイでは様々な理由から障がい児の育児放棄が起きており、両親がまだ 10 代のため障がい児に対応できないケースや、重度の障がいを持つ子を施設に入れる経済的余裕がないケースなどもあります。様々な理由で親を知らない子どもがいますが、CCD では、どんな理由であろうと子どもは産みの親を知るべきと考えており、子どもたちが産みの親と再会できることを目標の一つにしています。

CCD には通年で受け入れている欧米各国の青年ボランティアがあり、FHCP への引率などをサポートしています。

b. 使命

ホリスティックアプローチ（身体、精神、心理などさまざまな角度からのアプローチで問題解決を目指す手法）で障がい児の可能性を最大限引き出し、彼らが平等の権利・機会を得て生活の質を向上できるようサポートすることでキリストの愛を実践することを使命としています。

c. 実施事業

現在、タイ国内8か所でプロジェクトを実施しています。

- ・デイケア・センター 4か所
- ・Rainbow House（居住型ホーム）
- ・コミュニティ型リハビリ・プログラム3か所

デイケア・センターでは、タイ政府が運営する施設に暮らす障がい児たちにリハビリを行っています。

Rainbow Houseは、1990年にスタートした、育児のできない家庭出身の障がいのある子どもたちを対象としたホームです。一人ひとりに合わせた教育プログラムを実践していて、施設に居住している子どもたち向けと、施設に

通いながらデイケアを受ける子どもたち向けのプログラムを展開しており、発育講師や特別支援教員、理学療法士、職業訓練士が子どもたちの訓練指導に従事しています。

d. 資金サポートのしくみ

CCDは、さまざまな支援・寄付により運営されています。

- ・教育支援
- ・養子縁組
- ・ボランティア受け入れ
- ・お金、食事、おもちゃ、機材などの寄付

(2) フォーデック

Foundation of Rehabilitation and Development of Children and Family (FORDEC)

<http://www.fordec.th.org/>

詳細は「IV. 訪問した施設について 3. フォーデック」(P.8) 参照。

(3) 感謝の家

Thanksgiving Home

ノンタブリー県で 2012 年 1 月より運営を始めた NPO で、知的障がいやその他の障がいを持つ若者（その多くは若い女性）の自立支援をしています。職業訓練として理髪、タイマッサージ、タイ舞踊、音楽、アート、英語などのスキルを身につける支援もしています。

(4) VFC

The Value of Life Foundation for Children

タイ北部ウッタラディット県にある VFC は、自閉症、知的障がい、ダウン症の子どもたちをサポートしています。

(5) YMCA 山岳少数民族の子どもたち

今年はラオスと国境を接するパヤオ県の子どもが参加しました。タイ北部山岳地域には多くの少数民族が暮らし、今でも独特の文化や伝統、生活習慣が残っています。この地域出身の子どもにとっては「海」を見ること自体が稀で大変貴重な機会です。

(6) バンプラドゥの子どもたち

タイ最北端に位置するチェンライ県の児童養護施設から子どもが参加しました。

(7) CFBT

Christian Foundation for the Blind in Thailand, Under the Royal Patronage H.M. the King

<http://www.cfbt.or.th/>

CFBT は、タイ全土に視覚障がい者の支援施設を有して

いて、約 2000 人をサポートしています。今年はバンコク、ロブリー県、ナコンナヨック県の 3 施設から子どもが参加しました。同団体は、地域のサービスセンターが管轄する地方保健所や国内外の NGO と協力体制を構築し、失明予防を目的とした活動も行っています。施設には、視覚障がいとともに、精神障がいや身体障がいなどの重複障がいを抱えている者も多くいます。

(8) 子ども福祉保護センター

Child Welfare Protection Center

タイ中部ラヨーン県から、両親のいない又は育児のできない家庭出身の子どもたちが参加しました。

(9) 特別養護教育センター

Special Learning Center, Chanthaburi

<http://school.obec.go.th/psecchanthaburi/index.php>

タイ中部チャナブリー県にある自閉症や知的障がいを持つ子どもたちを対象にした施設です。

(10) ファザー・レイ 児童養護施設

Father Ray Foundation

<http://www.fr-ray.org/>

米国出身のカトリックの司祭 Ray Brennan 氏が、1974 年以降、孤児や虐待された子ども、障がい児等の受入れのため設立した施設。文字通り、多くの子どもの「父」として、子どもたちの教育や生活の支援を続けました。2003 年、彼の葬式には多くの子どもたちが参列、また国王の名の下、彼の功績を称えたタイ王室より墓に埋葬される「王室の土」が贈られました。

(11) カンボジアの子どもたち

隣国カンボジアから子どもと引率者を合わせて 17 名が参加しました。

(12) ムーバーンデック

Children's Village School (Moo Baan Dek)

<http://www.ffc.or.th/mbd/>

詳細は「IV. 訪問した施設について 1. 子どもの村学園ムーバーンデック」(p.6) 参照。カンチャナブリーとタイ・ミャンマー国境より子どもと引率者を合わせ 180 名が参加しました。

(13) パックレット 「少年の家」

Pak Kred Home for Boys

ノンタブリー県パックレットの両親のいない又は育児のできない家庭出身の少年たちが暮らす公的施設です。

(14) 40 ライ・オンヌットコミュニティ

バンコク近郊オンヌット地区より参加しました。

(15) タイ難民キャンプ委員会 (TCR)

参加者の中には、シリアやパキスタンからの難民の子どもたちがいました。

(16) タイ南部国境地域の子どもたち

仏教徒よりもムスリム (イスラム教徒) が人口の多くを占める、マレーシアに近いパッタニー、ヤラー、ナラティワート県から子どもたちが参加しました。中には、以前同地域で起きた暴動で両親や家族を失った子どももいます。

6. 参加団体の所在県

下図の通り、タイ各地 (色が塗られた県) より参加団体が FHCP 会場に招待されました。

カンチャナブリー県とサムットプラカーン県の「o」が示す場所には、このスタディツアーで日本人ボランティアが訪問した三つの児童養護施設 (①～③) があります。



VI. 参加者名簿

	氏名		性別	職業 / 出身県
1	小川 彩華	Ayaka OGAWA	女	新社会人 / 東京都
2	菊間 大輝	Daiki KIKUMA	男	学生 / 静岡県
3	酒井 菜津子	Natsuko SAKAI	女	学生 / 北海道
4	佐藤 彩乃	Ayano SATO	女	社会人 / 東京都
5	佐藤 敬子	Keiko SATO	女	社会人 / 神奈川県
6	西川 佳奈子	Kanako NISHIKAWA	女	学生 / 東京都
7	細川 瑛代	Akiyo HOSOKAWA	女	学生 / 北海道
引率者				
8	松倉 弘子	Hiroko MATSUKURA	女	(一財) 青少年国際交流推進センター
9	貞包 みどり	Midori SADAKANE	女	(一財) 青少年国際交流推進センター

現地で配布した自己紹介リーフレット



VII. 参加者感想文

1. 【タイ王国・スタディーツアー2015に参加して】

小川 彩華



はじめに

「百聞は一見に如かず、百見は一験に如かず」本やテレビで知った情報と実際に現地へと足を運び、自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じる経験はあまりにも違うということを本事業の1か月前に参加をした、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」事業で改めて強く感じた。社会起業家精神コースに所属し、10か国の青年と議論を交わし、海外研修地のバーレーンにて様々な視点から社会起業なるものを学んだ。そして「夢」が近い将来への「目標」と変わる瞬間があった。このスタディーツアーに参加を決めた理由は、社会問題と五感で向き合い、自分がこれから継続的にできる社会貢献のカタチを模索していきたいと思ったからだ。

きらきら輝く笑顔に隠れる影

様々な理由により親や家族がいない子どもたち…しかしひとくくりに「可哀想な子たち」と決めつけてしまうのは、彼ら彼女らにとっても失礼だと思った。ほんの一部の生活しか覗けなかったから100%とは言い切れない、だけれど子どもたちはたくさんの兄弟たちや愛をくれる大人たち、豊かな自然に囲まれ、安全な場所でいきいきと生活しているように思えた。しかし何よりも衝撃を受け、悲しみを通り越して気持ちをことばに表現できなかった瞬間があった。それは、フォーデックという貧困層の子どもたちが通うデイケアセンターを訪れた時のことだ。施設はとてもきれいに飾り付けがなされ、子どもたちもきれいな服を着て、一見すると日本のどこにでもあるような保育園のように思えた。しかし彼らの住んでいる家を見させてもらった時に、自分の頭の中でイメージをしていたそれとははるかに違い、混乱した。きらきらの笑顔をした子どもたちが住んでいる家と呼ばれるところは、ごみが散乱し、ごみの中にかろうじて屋根があるだけのような場所だったからだ。たくさんの疑問が沸いてきた。「どうして子どもたちは、笑顔で幸せそうにしているの?」「国や自治体は何をしているの?」「彼らの家族は?」たくさんの疑問で頭がいっぱいになったとともに、「幸せって一体なのだろうか」、とわからなくなった。

For Hopeful Children Project

子どもたちが心待ちにしているという年に一度のビックイベント。その規模の大きさやわくわくするエンターテインメント度、とにかくすごい!の一言に尽きる。だからこそ3日間のキャンプが終わって、彼らが元の場所に戻ってどんな気持ちになるのかを想像すると心が痛んだ。こんなふうと思うのは自分よがりなのかもしれないが、涙を流してパイバイしたり、何度も何度もハグをしたり、I love youと言い合って別れをしたら、彼の置かれている広い世界を知らない状況を申し訳なく思ってしまった。しかし、やはりすぐには何も変わらないと思う。だけれど、もっともっと広くてわくわくする世界が広がっていることを少しでも感じとり、無限の可能性を切り開いていってほしいと心から願うし、自分自身単発のボランティアとしてもう二度と会わない関係になってしまうのではなく、「またね」と言って別れたのだからその約束をしっかりと果たしていきたい。25回目を迎えるこのプロジェクト。世界中からボランティアが集まり、ひとつの大きな目標に向かって多くの人が賛同し、協力をする。代表の Visit さんにお会いした際に、彼の人柄とリーダーシップによってプロジェクトが継続し、年々多くの人を魅了して大きくなっていっているのだろうと感じた。

魔法のことば “Yim-possible”

Impossible<不可能>...Y (Why) impossible<なぜ不可能>??... “Yim (Smile in Thai) -possible”<笑えば「可能になる」!!> 微笑みの国と呼ばれるタイ。毎日毎日たくさんの笑顔に出会うことができた。正直子どもたちとは、言葉でのコミュニケーションはほとんどとれなかった。しかし、笑顔を通して心を通じ合わせることができた！と自信を持って言える。多くの笑顔に救われ、励まされた。事業を通して世界中にたくさん仲間ができた。私たちひとりひとりの力はほんの小さいものかもしれない。だけれど力を合わせることで大きなことができるのだということに気付くことができた。一生忘れることの無い大事な宝物だ。実際に自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じたことを大切に、これからも学び続け、どんな小さなことでもできることを行動に移していく。思っているだけでは伝わらないのだから。Keep learning, Keep doing something, and keep smiling. 出会ったすべての人に心からの感謝と愛を。



2. 【タイスタディツアー2015】 菊間 大輝

はじめに

1年前にモルドバという国の孤児院でボランティアしていたことがあり、そのボランティア活動を通して、自分が認識している世界の狭さや考えの甘さに気づかされた。大げさではなく価値観が大きく変わったが、時間が経過するにつれてこの貴重な経験の記憶が薄れてしまっていたのも事実であり、ボランティア前と何も変わっていない生活にいつしか満足してしまっていた。そんな時に、このスタディツアーを紹介してもらった。また海外で孤児院の子どもたちと関わるができる、そして海外で障がい児と接することができるという内容は、大学で特別支援教育を学んでいる私にとって非常に魅力的であり、このスタディツアーに参加することを決めた。



幸せについて

このスタディツアーのメインイベントである FHCP の前に、私たちはムーバーンデック、タマヌラック、フォーデックという3つの施設を訪問させてもらった。3つの施設ともそれぞれ異なった特徴や雰囲気を持っていたが、どの施設の子どもたちも「よく笑う」というのが第一印象だった。しかし、ムーバーンデックで先生の話の聞いたり、フォーデックで子どもたちが住んでいる家を訪問した時に、「孤児」「貧困」という言葉に対して私が持っていた知識やイメージをはるかに超えるバックグラウンドを子どもたちは抱えていることに気付かされた。それは、私たちが入り込んではいけな領域ではないかとまで思うほどだった。それでも、子どもたちは常に笑顔。私の中に「なんで笑顔でいられるのだろう」「なんでこんなに幸せそうなのだろう」という疑問が浮かんでいる状態で FHCP を迎えることになった。

FHCPは、開会式が行われる前から海軍基地の広さ、ボランティアスタッフの人数、そして参加する子どもたちのわくわくしている表情から、このプロジェクトの壮大さと大切さを感じることができた。また、タイの様々な地域から参加団体が集まるが、その中にはムーバーンデック、フォーデックも参加しており、子どもたちと再会できた時は抱き合って喜んだ。その時の表情は、施設にいる時よりも笑顔で幸せそうに見えた。この時の表情がとても印象的で、「幸せって何だろう」と常に考えるようになった。

幸せを感じる瞬間は人それぞれであるし、1つではないことも理解している。しかし、私はこの経験から愛情が幸せを形作っている要素の1つだと考えた。再会できた時の子どもたちの幸せそうな姿が、私たちからの愛情が伝わっていたからだとしたら非常に嬉しいが、実際には分からない。ただ、子どもたちから愛情をもらっていた私は本当に幸せだった。だから、愛情が幸せに繋がっていると考えたし、それが笑顔を作っているのではないかと思った。

終わりに

このスタディツアーの内容は、どれも新鮮で濃厚でいろいろと考えさせられた。この貴重な経験ができたのは、ボランティアスタッフ、海軍、子どもたち、関わってくれた全ての方々のおかげである。その中でも、約1週間共に過ごした日本人ボランティアには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



3. 【タイ王国・スタディツアー2015】酒井 菜津子

笑顔がステキなタイの子どもたちと直接触れ合いたい！というのが最初にこのスタディツアーを知って私が思ったことだった。ほぼ同時期にタイ周辺を旅行する予定であり、観光地のみでなく色々な場所、生活を見たい、地元の人々と関わりたい、地域に根差した活動をしてみたい、と考えていた私にとって、このタイ王国・スタディツアーは大変魅力的な機会であり、また自分の想像していた以上に本当に多くのことを学ばせてもらった。



タイ児童養護施設訪問

ただ日本から来たというだけの自分に一体何ができるのか、どうやって子どもたちと仲良くなるのか、最初戸惑いがあったが、タイの日差しのように素直で真っ直ぐな子どもたちと時間を共有するうちに、良い意味で考えすぎる 것이なくなり子どもたちと遊ぶことを純粋に心の底から楽しんでいた。

最初に訪問したムーバーンデックには二日間宿泊させていただき、また詳しく学校内を案内していただいたこともあり、ここの子どもたちや学校環境について感じるが多々あった。ここでは子どもたちと川で遊び、夕日が沈むのを見ながらご飯を食べ、夜は空いっぱいの星を観て、朝は鶏の鳴き声で起きて、という自然の中で贅沢な時間を過ごした。

次に訪れたタムスラックは仏教の精神が教育方針の根底にあるためか、オルタナティブ教育を行うムーバーンデックとは子どもたちの雰囲気少々異なり、子ども時代の教育が与える影響を感じた。最後に訪問したフォーデックでは、綺麗な施設で制服を着た子どもたちが親の迎えを待っていた。しかし一歩外に出ると低所得者層の家庭があり、いつ追いつかれるかも分からない状況の中でフォーデックの子どもたちが家族と暮らしていた。日本で普通に暮らしている私にとって目を背けたくなるほどであり、“普通の暮らし”とは何なのだろうと分からなくなった。バンコクのきらびやかさとの違いを自分の目で見て、タイが急速な発展の裏に抱える現実を旅行者では見られない視点から見た思いがした。

FHCP

FHCP とは、障がいを抱える、または親がいないなどの理由により社会的に恵まれない状況にあるが希望ある子どもたちが、タイの海軍基地に招待され三日間様々なアクティビティを体験しまた様々な人と関わる、といったプロジェクトである。

私が FHCP の中で行うボランティアも結局は一時的なものであるかもしれないし、そこに何の意味があるのだろうと心のどこかで思っていた。しかし、FHCP の創始者である Visit 氏が未来ある子どもたちのために 25 年間毎年このプロジェクトを続けてきた、ということの偉大さを FHCP に参加することで実感し、自分の考え方や行動の仕方次第で同じボランティアという言葉の意味も大きく変わるということを感じた。

今回このスタディツアーに参加したことで、自分の中で当たり前だったことかもしれないと思っていたことも良い意味で崩れた。スタディツアーを通して、継続することの大変さ、子どもたちの抱えるもの、彼らの将来、私が今すべきことや私たちにできることを考えるきっかけをたくさんいただいた。学生の私に今何ができるのか、どう今後に繋がっていいのか、まだ定かではないが、ただ今回タイに行って経験をして終わり、ということにはしたくないと強く思う。今はとにかく、また来年も参加することで一度きりの関係にしたいと思っている。

最後にスタディツアー参加者・引率者の方々、FHCP スタッフやボランティア・海軍の方々、バスの運転手さん、そして教育施設の方々や子どもたち、関わってくださった皆様コップンカー♡ステキな人々やステキな考えとの出会いに感謝です。ありがとうございました！◎



4. 【タイ王国・スタディツアー2015】佐藤 彩乃

プログラムを終えて

自己成長といろいろなことを考えるきっかけになった今回のスタディツアーは私の期待していた以上に素晴らしい経験になった。ここではプログラムの中で私の心境



の変化を中心に自分が直面した問題、課題をどう乗り越えていったかを学んだのかをまとめたい。社会問題を解決するにはまず、自分自身の考えや気持ちが重要なカギになると思ったからだ。読者にとってプログラム全体の様子を知るには分かりにくいと思うが、今後このプログラムに参加するに当たってきっと役に立つだろう。そう願いつつ、今回の報告書としたい。

ムーバーンデックの数日間

プログラムの始まった頃は参加メンバーが自然と子どもたちと遊んでいるように見えて焦った私は、何をどうしたら良いのかわからず、一緒にいたがっていた女の子と静かにテレビを見ていた。ぎこちない空気が流れ、私はただただ戸惑うばかりだった。私が彼女を無視していると周囲に思われていないか、彼女自身は私と居て楽しいのだろうか、せっかく関わってくれているのに、何を話したら良いのかわからず、不安が募るばかりだった。私の知っているタイ語は限りなく乏しい。そして突如始まったその子と近くにいた女の子たちの小突き合いは、私を非常に困惑させた。何か悪いことでも言われたのか、言ったのか、目を離したすきに知らないうちに何があったのかわからない。兎にも角にも間を割って入り、やんわりと No を伝えその場をしのいだ。ムーバーンデックでの滞在は短い。翌日はもっと積極的に関わってみようと思った。

タマヌラックでの数時間

パフォーマンスの「世界手洗いダンス」を必死に踊った後もっと積極的になることを念頭に頑張ってみてこの日、子どもたちの様子を記録したい気持ちがなぜだか高まった。初めはカメラに向かって笑うどころか無視されたり恥ずかしがられたりしたが、遊びながら気持ちを通わせることでリラックスして写真を撮らせてくれた。良い笑顔だなあと思いながら、撮った写真を見せると本人も満足そうにしていた。キラキラ輝くその瞳とはじける笑顔に私も自然と笑顔になる。我々の帰る時間になるとぐずりもせず見送る姿に、私にはない潔さを感じ、名残惜しい思いをしている私がちょっぴり大人気ないと思った。色々な人たちと出会い、一時的に心を交わし、別れることに馴れている彼らは大人の事情や自分たちの置かれている立場を分かっているのだろう。10 歳くらいの子どもの気持ちを考えると私はぐっと唇を噛みしめていた。そして笑顔でムーバーンデックに戻るバスに乗り込んだ。

FHCP (For Hopeful Children Project) での数日間

私にも楽しい一時であった FHCP ではフォーデックという子どもたちのデイケアセンターを主に担当した。一緒に汗だくになりながら踊り、海水浴に行ったことが忘れられない思い出となった。貝を拾ったり夜寝る前のおやつを時間を一緒に過ごしたり…私の知っているごく普通の子供たちが遊ぶ風景が広がった。この穏やかな空気が彼らの普段の生活にも流れるのか少し不安にもなった。私が知っていることは、彼らの家庭の事情が複雑で、個人個人が抱えている問題が非常に重いことだ。ある日、私と一緒に過ごしていた中学生くらいの女の子のグループが、しばらくして私が幼い子たちと一緒に過ごすよう勧めてくれた。彼女たちのタイ語の会話についていけないでいた私への配慮、心遣いだと気が付いた。さらに私が寝不足と暑さで疲れていたことにも気付いて、帰り際に気遣って良く休んでねとジェスチャーしてくれた。「コップンカー」と言い、私の気持ちを伝えた。この時、私は自分が彼らをサポートするばかりではなく、私も彼らからサポートしてもらっていたのだと思った。

プログラムを通して

海外で初めてのボランティア体験をし、不安と期待でいっぱいだった数日間。私にとって大きな成長になると信じて

全力で頑張ったからこそ、得る物が多かった。一番は、言葉の壁があっても関わる人たちを笑顔にしたいという気持ちが大切なのだと学んだことだ。置かれた境遇を不憫に思い、どうにか幸せにできないかと思ったこともあったが、子どもたち（といっても年齢は幼稚園生から中学生くらいまで幅が広い）にとって何が幸せかなのか、当初の私にはわからなかった。「幸せ」の度合いは自身が判断することで、誰かが決めることではないと分かっていたから、私に何ができるのか一瞬、悩んだこともあった。しかし最終的に出した答えは、彼らを「笑顔」にすることだった。FHCP の T-シャツにプリントされたタイ語で笑顔を意味する「Yim」が私にできることだと信じて頑張った。

参加メンバーの皆、一緒に旅をしてくれてどうもありがとう。そしてツアーをコーディネートし、我々をサポートしてくださったひろさん、みどりさん、どうもありがとうございました。最後に、タイでサポートしてくれた全ての人たちに心からの感謝を。コップンマーカー！Khop khun maak ka！



5. 【気づきと学び】 佐藤 敬子

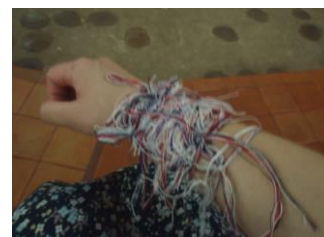
バーシーの儀式

バーシーという儀式がある。人生の節目や歓迎、送別などの際に祈りを唱え、主役の腕に糸を結ぶ。今回訪問した施設で子どもたちが私たちのために一列に並び、「幸せになりますように」、「お金が入って来ますように」などの祝福の言葉を唱えながら、糸で私たちの腕をなでた後にそれを結んでくれた。

海軍キャンプでの日本人の出し物で使った光る腕輪を、今回、家庭訪問をさせてくれた小学3年生の少年にあげた。彼の家はゴミの中のバラックだった。腕輪を付けた後に、「この子の生活が良くなりますように」と願いながら私は指で彼の腕をなでた。彼は合掌し深々と私に頭を下げた。

ボランティアと子どもたちが舞台の上で楽しそうに踊っているのを眺めながら私は椅子に座っていた。あの少年が舞台から降りて来て私の手を引いて舞台に上げた。彼と一緒にリズムに合わせて踊った。

帰国してしばらく経つが、まだバーシーの糸を外せずにいる。



1年の長さ

引率者が子どもから「去年来た Keさんは今年来ないの？」と聞かれた。来ていないと答えると英語で「I love sheep!」と書かれた手紙を託されたそうである。

Keはタイ語で羊を意味するという。去年たった一度訪れた日本人を待っている子どもの1年は恵まれた私たちの過ごす1年よりもずっと長いと知った。

海軍キャンプが終わって子どもたちと別れる時、拙いタイ語で「またね」と言ったら、射抜くような強い瞳で何か言われた。タイ語だったが、「本当に?」「絶対だよ!？」と念を押された気がする。

日本人はもう会わない人にも「またね」と言う。私の「またね」を彼らは1年待つのだろう。

まずは知る

クウェー川鉄橋に案内してもらった。ここは映画「戦場にかける橋」の舞台となった。タイは初めてなのに、私は訪問先について何も下調べをしていなかった。

橋の上で楽しげにたくさん写真を撮った後に、ここは第二次大戦中、日本軍が連合軍捕虜と現地の労働従事者に強制的に作らせた鉄道だったと知った。大雨、コレラ、マラリアに加え、敗戦間近で切羽詰まった日本軍の虐待や重労働の劣悪な環境で大勢の人が命を落としたという。戦後70年の今、ここは平和を考える場所だったのではないか。

駐車場から橋に行くまでの土産物店の人目に付かないところに当時の写真が飾ってあった。通り過ぎるだけでゆっくり見なかった。他にもタイの政策や制度、社会の仕組みなどを事前に知っていたらこのツアーの意義が更に深まったと思う。

継続すること

「東南アジア青年の船」事業の事後活動組織のネットワークの強さや、25年間という長期間、ボランティアを継続して実施運営している事実には驚きを隠せない。

募金をしたり、ボランティアに参加したりすることは一時的にできても、継続することが最も困難である。

「労働は日本人の義務。就職とは社会の中で自分のできる役割を担うこと」とは大学時代の恩師の言葉。

今後は役割を担ったうえで、社会のために何を継続して行えるかを考えつつ、来年も子どもたちに会いに行く。とりあえず嘘つきにはならないように。



.....

6. 【タイ王国・スタディーツアー2015】西川 佳奈子

参加の動機

私が今回のタイ王国スタディーツアーに参加したのは、以前から海外ボランティアや子どもたちとの関わりに興味があったからだ。今まで具体的にボランティア活動などをしたことはなかったが、「東南アジア青年の船」事業の報告会でこのスタディーツアーについて知り興味を持ち応募を決意した。行くことが決まってからも、子どもたちがどんな様子なのか、どのようなところで生活しているのか全く予想が出来ず、何を準備したらいいのか、言葉も通じない、初めて会う子どもたちとどのように接したらいいのかと不安なこともたくさんあった。



ムーバーンデック

実際に子どもたちが生活する場所へ行ってみると私が想像していたのとは違い、子どもたちは自由に歩きまわり、広々

とした場所で山や川などの自然に囲まれのびのびと生活しているようにも見えた。ムーバーンデックには、貧困・虐待・両親がいないなど様々な理由で預けられた子どもたちがいた。彼らの生活は、掃除をしたり、授業を受けたり、ワークショップといって工作やペインティング、織物、音楽、パン焼きなどの中から自分のやりたい事を選択し実習をしたり、川遊びをしたりといったものだった。子どもたちが自由にやりたいことを選択し、それに向かって挑戦できるような支援体制が整っていた。子どもたちの年齢は様々なので、年上の子が小さい子の面倒を見るなどみんなで支え合って生活しているところが印象的だった。

タマヌラック

タマヌラックでは、お坊さんがいたり、先生の指示に従い一列に並んで座ったりなど子どもたちが自由な雰囲気のもーバンデックとは異なっていたが、子どもたちは日本人が持ってきたおもちゃで夢中になって遊んでいた。

FHCP

For Hopeful Children Project は今回のプログラムのメインイベントで、タイのチョンブリーにある海軍基地で、タマヌラックやムーバンデックなど、貧困や両親のいない子どもたち、障がいを持った子どもたちなどのために行われるキャンプだ。海軍の人たちやタイの現地ボランティア、各国からのインターナショナルボランティアが子どもたちと触れ合い、海で遊んだり子どもたちのために様々なイベントを行ったりした。ナイトプログラムでは、ボランティアからの出し物や、子どもたちからの歌やダンスが披露され、お祭りのように盛り上がった。ご飯の時間は屋台がたくさん出て、子どもたちは好きなものを好きなだけ、おなかいっぱい食べていた。FHCP は子どもたちにとって一年で最も楽しみにしている行事のひとつであって、一人一人の子どもたちはキラキラ輝いた笑顔で、とても楽しそうだった。

最後に

このスタディーツアーを終えてたくさんのことを感じ、学んだ。一緒に参加したボランティアからも、たくさんのことを共有し学ぶことができ、支えてくれた人たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。貧困だったり、虐待を受けた子どもたちが、今は本当に子どもたちの事を考え、親のような存在である人のもとで暮らしている。施設にいればおもちゃもシャワーもあるし、ご飯も食べられる。しかし大人になるにつれ自分は周りの人とは違うと感じ嫌な思いや、寂しい思いをする時があるかもしれない。そんな時私たちのことや、短い時間だけどキャンプで一緒に過ごした時間、そして自分は一人ではないということを思い出し、壁を乗り越えてほしい。この思い出が少しでも彼らの支えになればいい。この後の活動として、一回行っただけで終わってしまうのではなく、洋服や絵本を送るなど日本からでも出来る子どもたちのためになることをしたいと思っている。



.....

7. 【わたしがセカイにできること】 細川 瑛代

はじめに

このたびタイ王国スタディツアーに参加できたこと、心から嬉しく、そして誇りに思います。わたしは、2014 年秋に内閣府と青少年国際交流推進センター主催の日本 ASEAN ユースリーダーズサミット (YLS) に参加しました。普段は、留学生などはあまり見かけないような小さな大学で勉強しているので YLS では日本の、そして世界中の優秀な人々に出会って衝撃を受けました。そして同時に、わたしもこうしちゃいけない！と強く思いました。でも、その気持ちの矛先がなかなか見つからないままでした。そんな中半年近くが過ぎ、飛び込んできたのがこのツアーの案内でした。これは行くしかない！と気付いたら応募書類を書き始めていました。初めての海外渡航、しかも渡航日が 21 歳の誕生日。参加が決まったのは出発の 3 週間前。集合場所は空港から電車を乗り継いだ先の、タイ・バンコクのホテル。訪ねていくのは、遠い場所の孤児たち。初めてセカイを見に行くにしては、ずいぶんの大冒険だったような気がします。



崩れ去ったワタシの常識

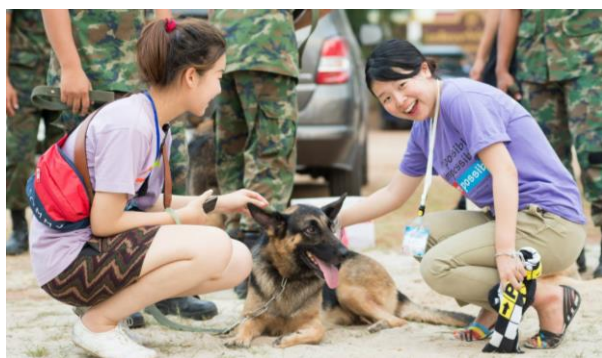
フォーデックダイケアセンター周辺の低所得者層家庭を訪問した時のことです。いわゆるスラムでした。まず、フォーデックに子どもを日中預けているとのことで、金銭的に困っていることはわかっていました。でも、実際にその家庭の「おうち」を見に行ったら愕然としました。あたりはゴミだらけ。そして言うならばおうちというより「秘密基地」といったところ。かろうじて雨露を凌げる程度に思えました。そこでわたしが思ったのは、どうしてこの大量のゴミをそのままにしておくのかということ。わたしが知っているような「おうち」じゃないことは置いておくとして、なんでこんな大量のゴミを拾わないのかな、片付けないのかな？と。聞いたところによると、この場所に合法的に住んでいるわけではないとのこと。もちろんいろんな事情があるのだと思いますが、こんな小さなことでさえ、ワタシの常識は通用しませんでした。理解できない、わからないことだらけだったんです。そして、究極にわからなかったのが、「この状況で笑っていただけること」でした。

気付きと意味づけ

25 年目の FHCP に初めてスタッフとして参加して、考えていたことがあります。たくさんの企業が協賛して、海軍も基地を提供して、海兵さんたちも協力して、世界各国からもボランティアスタッフがやってくる。なんて影響力のあるプロジェクトなんだろうと。でもそれと同時に、このプロジェクトの意味がわからなくなりました。このプロジェクトによって、参加してくる彼らの普段の生活レベルが向上するわけでもないよなあ、と。でも最終日、涙で顔がぐちゃぐちゃになりながら子どもたち（とくにムーバーンデックと一緒に過ごした子たち）と別れたとき、ずっと、わかりました。たった 3 日間だけど、子どものころにこうした楽しい経験ができて、記憶に残っていくこと。これ以上素晴らしいことはないだろうと。この場所でたくさんのピー（タイ語で、お兄さんお姉さんのこと）が自分を気にしてくれて、楽しい気持ちになるという経験が何よりの財産なんだと、自然に出てきた涙から学びました。そして同時に、これだけ多くの人を巻き込んで、25 年間 FHCP を守って、続けてきた Visit さんに対して、心からの尊敬の念を抱きました。一人じゃ成立しないこの大きなプロジェクト。ボランティアという協力者も楽しいから、こんなに続けてきたのだと思います。

わたしがセカイにできること

「きっとこの世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔だと思う（福笑い/高橋優）」なんていう一節を持つ曲があります。今回のスタディーツアーに対するわたしの感想は、もうこの一言を借りて済ませてもいいのではないかと思ったり、プログラム中も頭の中にもありました。わたしはタイ語ができません。出会った子どもたちはタイ語しかできません。でも一緒に楽しい時間を過ごすことは、十二分にできました。言葉無しでもとっても仲良くなって、お別れのときに FHCP でもらったぬいぐるみをプレゼントしてくれた子がいました。一緒に過ごした時間、その子はいつも笑顔でした。その子には悲しい過去があるかもしれません。それでも笑っている。9日間のプログラムで話した人、触れ合った人、そして友達になった人は数えきれません。でもほとんどの人は笑顔でした。タイ語では笑顔を Yim というそうです。わたしのいままでの常識で考えたら、「幸せ」じゃなさそうな人もみんな Yim でした。思い描いていた幸せの概念が崩れ落ちました。21歳の春、こんなあたりまえのことに気付けたわたしは最強の「幸せ者」だと思います。これに気付けたわたしがセカイにできることは、、、たぶん無限大です。正直まだわかりません。でも、世界のどこかで起こっていた子どもの貧困、劣悪な生活環境が、タイのあの場所のあの子の問題になりました。ちょっとだけ自分ゴトになりました。これも知れたことが、最強のアドバンテージだと思っています。常識を打ち砕いてきて、Yimの可能性に気付いて、わたしはもうセカイになんだってできる人間になれました。でもきっと、わたしだけじゃない。じゃあ、何をしようかとこれからの人生かけて考えていこうと思います。ツアー中みたく頭がパンクしてしまうかもしれないけど。本当に意味のある時間でした。コップンカー！



【タイ王国・スタディーツアー2015 振り返り】 一般財団法人 青少年国際交流推進センター 松倉 弘子・貞包 みどり

今年も Visit 氏を始め「東南アジア青年の船」事業タイ事後活動組織、その他ボランティアのサポートによって無事にスタディーツアーが終了した。いくつかのトピックを挙げながら、スタディーツアーを振り返る。



◆日本人ボランティア

今年も、スタディーツアーに参加してタイの子どもと触れ合い自身を高めたいと、学生と社会人を含む7名の参加者が集まった。年齢や背景も異なるメンバーで同じ時を過ごし、施設訪問後には一日の振り返りなどを行った。各々が受けた印象や考えたことを共有して意見をかわすことで、気付きのきっかけになったり、ときに深い話し合いに発展したりした。大きなグループではなかった分、より個々の声を聞くことができた。

◆迎えてくれた子どもたち

訪問先の施設で、最初は少し恥ずかしがりながら、私たちと一緒に踊ったり遊んだり、人懐っこい顔を見せてくれた子どもたち。昨年会った子が一年で見違えるほど成長していたりして、改めて一年の大きさに気付いた。「大きくなったね！去年会ったの、覚えてる？」その質問に、はにかみながら嬉しそうにうなずく笑顔が印象的だった。

行く先々で触れ合う子どもたちの純粋さや可愛さは、写真でも存分に伝えている通りであるが、このスタディツアーでは、子どもたちと向き合っていくうちに、彼らのあどけなさだけではない一面にも触れることになる。

ある時ムーバーンデックの副校長から、タイの社会問題が複雑化するにつれ、子どもたちの抱える問題もより複雑で深刻化している現状について話を聞いた。プライバシーや子どもの尊厳を考えると書くことをはばかれる内容も含まれるが、子どもの中には過去に親から捨てられ放置された経験から、いまだ暗闇や大きな物音に敏感で、完全にトラウマがなくなるまでゆっくり療養を続けている子や、児童売春から保護された子もいるようだ。

訪ねて行った私たちは、子どもたちと触れ合いながら、彼らからもいろいろなことを教えてもらったように思う。複雑な気持ちを抱きながらも、参加者それぞれが、今自分に何ができるのかを考えるきっかけとなった。

◆Visit 氏のリーダーシップ

「希望あふれる子どもたちが、社会で自信を持ち笑顔で生きていけるように…」Visit 氏が FHCP 開催にかける想いは熱く、穏やかな中に本気度が伝わってくる。その想いを語る時、相手がメディアであろうと、海軍の地位の高い方や協賛企業であろうと、Visit 氏の姿勢は変わらない。FHCP 第 25 回を記念した宣言文の署名式で、署名者の一人である協賛企業の CEO を紹介しながら、Visit 氏が次のようにあいさつした。「普段は何億というビッグビジネスの契約書にサインしているグローバル企業の CEO が、今日はこの宣言文署名のために足を運んでくださっている。その他の署名者たちも、その立場や支援方法は違っても、大切なのは子どもたちの役に立ちたいという共通の想いであり、その想いを形にしたのがこの宣言文である。」的確で気の利いた言葉と共に笑顔で CEO への謝辞を述べながら、様々な立場の支援者の想いを束ねていく。今回の宣言文では、スポンサーをしている企業も児童養護施設の代表者も、同じ紙の上では優劣なく平等であることを表したいと話していた。そんな Visit 氏の一貫した姿勢は、ボランティアスタッフや当事者である子どもたちに対しても変わらず、その魅力こそが FHCP の原動力となっているのだと思う。

この宣言文作成に当たっては、普段は別の専門を持ちプロフェッショナルとして働く、多くのタイ人ボランティアの知恵と経験がいかされており、改めてこの FHCP に関わるスタッフ陣のスキルの高さに感心したことも付け加えたい。

◆最後に

(一財) 青少年国際交流推進センターの運営するこのスタディツアーは、ただ単に児童養護施設を訪問して子どもと一緒に過ごした時間をボランティア実績とするような、表面的で単純な経験を提供するものではない。深く疑問を掘り下げて考えるきっかけ、それを一緒に体験できる仲間との出会い、自身と向き合う時間など、内面的にも大きく成長できる機会にあふれた特別なスタディツアーである。受け入れ側である現地タイの関わりの度合いを考えても、他に例を見ない、ぜいたくなスタディツアーだ。このスタディツアーの存在を多くの人に知ってもらうことで、タイという国や子どもたちの現状についての理解者が増えると共に、FHCP というダイナミックな事業にも、今後継続的に日本人ボランティアが参加できる機会を提供していけることを願っている。



Special Thanks!

タイでお世話になった皆さん



私たちに同行しながら、素晴らしい写真をたくさん撮ってくれた
プロ・フォトグラファーYoくん(中段左端)と、スタディツアー全日程を
コーディネートしてくれた New ちゃん(中段左から二番目)はじめ、みんな本当にありがとう！

【関連リンク】

- ① FFF(Fund For Friends):(英語とタイ語)
<http://www.fffthai.org/>
FHCP の実施団体であるボランティアグループのサイト。
過去の実績や写真、FHCP のイベントを紹介した現地の新聞記事などが掲載されている。
- ② MACROCOSM マクロコズム Vol.110 (2015 年 5 月発刊):
一般財団法人 青少年国際交流推進センターが発行している情報誌のウェブサイト版
<http://macrocosm.jp/>

FHCP2015





Copyright >> For Hopeful Children Project 25th <<

一般財団法人 青少年国際交流推進センター
Center for International Youth Exchange (CENTERYE)

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階
Tokyo Nori Building 6F, 2-35-14 Ningyocho Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo
103-0013 Japan

Tel: 03-3249-0767 Fax: 03-3639-2436 E-mail: fhcp@iyeo.or.jp